

【日常生活の痕跡】

館の北部から北東部にかけては、当時のゴミ捨て穴(土坑)や、台所と考えられる竈、蔵などが見つっています。特徴的な土坑として、一度の饗宴で使用した土器や食べ物の残りがすなどをまとめて捨てた一括廃棄土坑と呼ばれる土坑があります。これらの土坑から出土した土器を分析すると、当時の京都で使用されていた土器と同様の作り方で、武家儀礼様式に合わせた様々なサイズの土器を使用していたことが判明しました。また、土坑からは土器のほかに、食材の残り(骨や貝殻など)も出土しており、これらの食材の分析と文献史料に残っている献立記録から、当時の宴でもてなされた食事の内容が再現されています。

また、石組井戸も複数検出されており、そのうちの一つを池泉庭園の南側に復元しています。

写真G・H・I



G 廃棄土坑30次調査 H 石組井戸
I 竈周辺 J 井戸出土の金箔土師器皿

【文献史料に記述された館内の施設】

発掘調査では見つかりませんが、当時の文献史料には、当主の居室である「常御座所(つねのござしょ)」や、饗宴を行った「会所」、連歌の懐紙を保管した「文庫」、馬を係留した「七間五間御厩(しちけんごけんおんうまや)」などの施設があったことが記されています。このほかに、公式儀礼や政務を執り行う「主殿」などの施設もあったと考えられています。

大内氏や大内文化のことを詳しく知りたい方

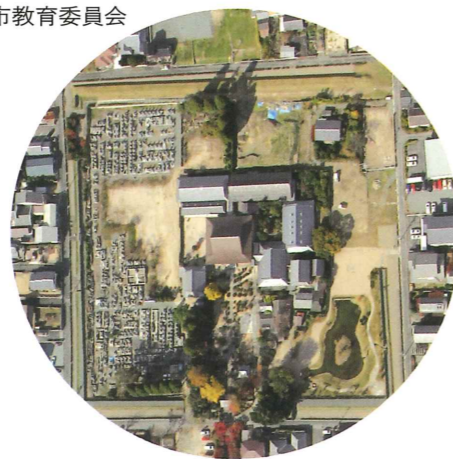
- 大内氏や大内文化の入門本
山口市・網野ゆかり編 2021『大内氏がわかる本 入門編』山口市
- 大内氏や大内文化に関して文献・文芸・美術・考古学のそれぞれの専門家が執筆した概説書
大内氏歴史文化研究会編 2019『大内氏の世界を探る』勉誠出版
- 大内氏館の発掘調査報告書
山口市教育委員会編 1981～2014『大内氏館跡1～15』山口市教育委員会
- 大内氏に関連する歴史資料をまとめたもの
山口市編 2010『山口市史 史料編 大内文化』山口市

大内氏遺跡シンボルマーク

このマークは、史跡大内氏遺跡附(つきたり) 凌雲寺跡のひとつ凌雲寺跡から出土した軒平瓦(のきひらがわら)の文様をもとに作成したものです。この瓦の時期は16世紀前半のもので、大内氏遺跡最盛期にあたることから、大内氏遺跡のシンボルマークのモデルとなりました。



大内氏遺跡シンボルマーク 凌雲寺跡出土瓦の菱文



続日本100名城スタンプ設置箇所

- 山口市歴史民俗資料館/山口市春日町5番1号(定休日・月曜日、祝日の場合はその翌日)
 - 大路ロビー/山口市下堅小路115-3(定休日・火曜日、祝日の場合はその翌日)
- 高嶺城への登山ルートなどの案内は、山口市歴史民俗資料館に設置しています。

お問い合わせ先

山口市教育委員会文化財保護課

TEL 083-920-4111 FAX 083-920-4112 E-mail bunkazai@city.yamaguchi.lg.jp



山口市歴史民俗資料館

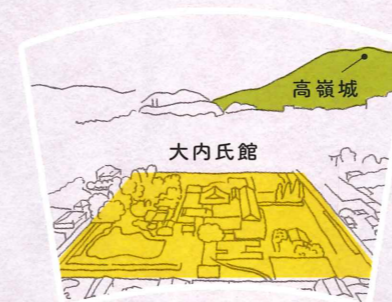


大路ロビー



国指定史跡・続日本100名城

大内氏館・高嶺城



14世紀後半 西暦1400年
15世紀前半
15世紀後半 西暦1500年
16世紀前半
16世紀後半 西暦1600年
17世紀前半

【大内氏館】
室町時代から戦国時代にかけて、中国地方西部から北部九州を治めた守護大名・大内氏の居所であるとともに、政治的拠点であった場所です。これまでの発掘調査の成果により、遅くとも14世紀末から15世紀初頭には、現在の位置に館が築かれた後、16世紀中頃に大内氏の滅亡とともに館が廃絶するまでの約150年間、同一の場所に屋敷地を拡張させながら居館が営まれていたことが明らかになりました。

【高嶺城】
大内氏最後の当主・大内義長が、毛利軍の侵攻に備え、弘治2年(1556)に築城を開始した城です。館の西方に位置する鴻ノ峰(標高338m)を全体的に利用した壮大な山城で、特に大内氏館に面す東側山麓部から山頂にかけて曲輪や登城路が配置されることから、館との一体性を意識したものと考えられています。大内氏滅亡後は、毛利氏の支城として改めて築城され、元和元年(1615)の一国一城令により破却されました。主郭に残る石垣の多くは、天端隅角の石積が崩落しており、破却の痕跡と考えられています。



続日本100名城とは

『続日本100名城』とは、公益財団法人日本城郭協会により平成29年4月6日(城の日)に発表されました。平成18年に選定された『日本100名城』に続くもので、『日本100名城』と同様に、優れた文化財・史跡であること、著名な歴史の舞台であること、時代・地域の代表であること、以上の3点の選定基準をもとに選定されています。